# 創世ホール通信No. 306

催し案内＋文化ジャーナル
2020年７月１日発行■北島町立図書館・創世ホール
電話：088-698-1100　ファクシミリ：088-698-1180
〒771-0207　徳島県板野郡北島町新喜来字南古田91

## 創世ホール名画鑑賞会vol.32
## 『新聞記者』

日時：令和２年９月27日(日)
①午前10時30分／②午後２時
会場：3階　多目的ホール

前売り券の購入について、ただいま図書館カウンターでの販売は停止しております。カウンター及び電話での予約受付のみの取り扱い(前売り券の代金は開催日当日に、受付にてお支払いいただきます)となります。ご了承ください。
入場料：大学生・一般　前売1,000円(当日1,300円
小・中・高　当日のみ1,000円
シニア(60歳以上)当日のみ1,000円

上映作品：『新聞記者』(2019年・日本・113分)
原案＝望月衣塑子『新聞記者』(角川新書刊)
出演＝シム・ウンギョン　松坂桃李　他
監督＝藤井道人
主催：創世ホール名画鑑賞会実行委員会
(☎088-698-1100)

■東都新聞の若手記者・吉岡(シム・ウンギョン)の元に届いた一通のFAX。そこには大学新設計画の極秘情報が匿名で告発されていた。■吉岡が独自取材を開始する一方で、「国民に尽くす」という使命感に燃える内閣情報調査室の官僚・杉原(松坂桃李)に、現政権に不都合なニュースをコントロールせよと命が下る。■真相究明にもがく新聞記者と、使命と任務の間で葛藤するエリート官僚。二人の正義が対峙するとき、衝撃の事実が明らかになる。■原案は望月衣塑子氏が自身の記者としての歩みを綴った『新聞記者』■第43回日本アカデミー賞に輝いた社会派エンタテインメント！権力とメディアの裏側を描いた話題作です。多数、ご参集下さい。

## 速報★鋭意企画中！
## 北島トラディショナル・ナイト vol.24

日時：令和２年10月17日(土)
午後７時開演予定
会場：3階　多目的ホール
出演：hatao＆nami(ハタオ＆ナミ)
主催：北島トラディショナル・ナイト実行委員会

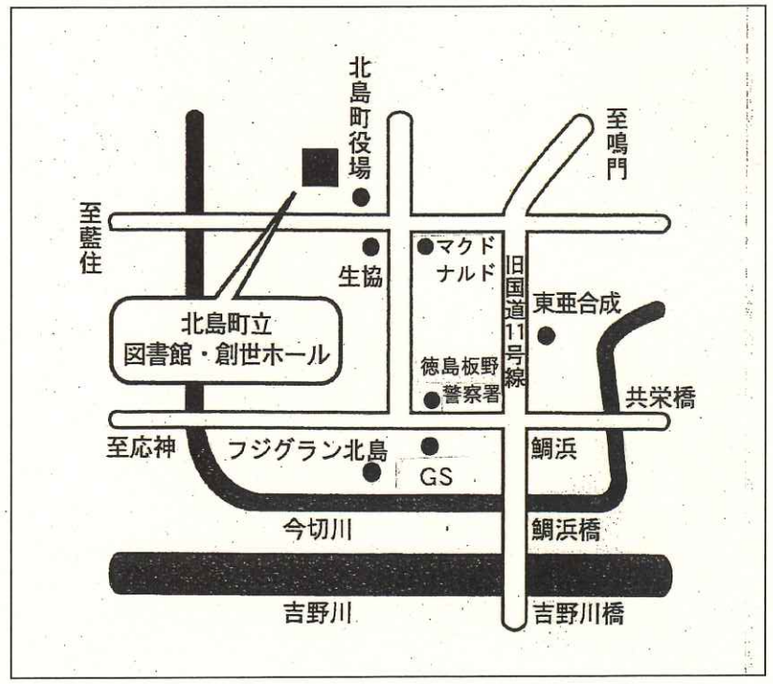
※チケット販売については次号以降でお伝えします※

■毎年ご好評いただいております「北島トラディショナル・ナイト」、今年も開催に向けて水面下で企画進行中です！■今年は北欧音楽の伝統的な笛奏者・hataoこと畑山智明氏と、ハープ、ピアノ奏者・namiこと上原奈未氏のデュオユニット・hatao＆namiが登場！ティンホイッスルやアイリッシュハープなどケルト音楽に欠かせない定番楽器から、北欧の地方に伝わる珍しい笛やスコットランドの伝統楽器・バグパイプなどユニークな楽器を駆使して、北欧音楽を彩り豊かに奏でます■あふれる異国情緒、けれどどこか懐かしい…北欧の伝承曲の魅力をたっぷり堪能できるひとときをお楽しみください！

### ※創世ホールに来場される方へ※

▼入場される方には、マスクの着用と手指のアルコール消毒をお願いいたします。
▼観客同士の距離を一定の間に保つため、3階多目的ホールの座席数を減らしております。(前後左右を１席空けてお座りいただくようにしております)
■なお、今後の感染症拡大状況に応じて、対応を変更することがあります。ご迷惑をおかけしまして恐れ入りますが、ご協力くださいますようお願い申し上げます。

hatao＆nami
左から　畑山智明、上原奈未（敬称略）



# 文化ジャーナル300号達成記念★第10号復刻掲載

■前号に続き「文化ジャーナル」を復刻掲載します。今回は第10号＝一九九五年十一月号です。ここには鳴門市ドイツ館の印刷物に初めて触れた際の衝撃、友人・知人・研究者などにそのことを知らせたこと、そこから文字とデザインについて考察を進めたこと等を書いています。折しも鳴門市ドイツ館の印刷物が、ドイツと日本から、ユネスコ「世界の記憶」（遺産）に登録申請を準備している時期であり、その側面支援の意味合いもあります（小西昌幸）

## 文◎化◎ジ◎ャ◎ー◎ナ◎ル

### 文字とデザインをめぐって①

■府川充男さんという私より５歳年長の東京の知人が、最近、**印刷史研究会**という会を作った。氏は、70年代の半ばに音楽雑誌の編集に関わり、必然的に割付（レイアウト）や装幀の仕事に手を染め、そこから単行本や雑誌の装幀・本文組版などを手がけるようになった人だ。彼は徹底した凝り性なので、どんどん突き進んで古い活字の書体研究にのめり込み、下町の印刷屋さんをまわって昔の活字を収集したり、**国立国会図書館**で印刷史にまつわる文献研究を行ない膨大な資料を収集し、その成果をいくつかの媒体に発表してきた。今では書物や文字デザインに関わる業界で著名な存在になっている。府川氏は、現在デザイン学校でタイポグラフィ講座をもち、先生とよばれているらしい。私は、1976年の終わりごろから親しくしてもらっているので、考えてみればもう20年近い交流だ。氏が雑誌や書評新聞などに発表した、活字や印刷史研究にまつわる文章を折に触れて読んだり、時々届く資料類を眺めたりするうちに、ごく自然に、私も文字の形や、書物のデザインや、印刷に関することなどに興味と関心を抱くようになった（もちろんあくまで気楽な、ヤジ馬的な関心にすぎない）。

■昨年の１月に私は、徳島市に住むデザイナーの**板東孝明**さんを訪ねた。**板東**さんは、府川氏の仕事を知っており、関心をもっているようだったので、話が弾み、以来時々私の手持ち資料を持参して事務所に遊びに行ったりするようになった。その**板東**さんが深く関わって仕事をしている、**朗文堂**（ろうぶんどう）という出版社が新宿にある。**朗文堂**は**ベネトン**のデザイン書や、タイポグラフィ年鑑、**板東**氏がデザインした**国際ＣＩ年鑑**などを発行しているポリシーのしっかりしたデザインやタイポグラフィ関係の専門出版社である。代表の**片塩二朗**氏は、**日本印刷学会**や**日本タイポグラフィ協会**の機関誌に印刷史に関する連載をするなど、やはりその道の本格的研究者である。

■その朗文堂に府川氏が現われたらしいと**板東**氏から聞いたのは昨年の夏ごろだったか・・・。**板東**氏と私のそれぞれの東京の知人同士が、ある必然性をもって交流をはじめたということが何とも面白かった。

■今年２月、私は東京出張の際、**朗文堂**におじゃました。**板東**氏から、上京したら**朗文堂**に行ってみるといいですよ、といわれていたのだ。代表の**片塩**氏は、突然の訪問にも関わらず、氏の文字研究の話をきかせてくださった。その後、氏が**印刷学会**の雑誌などに発表した資料が届き、夢中で読んだ。私は大事な資料は袋ファイルにして保存しているのだが「**朗文堂・片塩二朗**」ファイルは大切な資料として保管している（もちろん府川氏や**板東**氏の、ぶ厚い袋ファイルもある）。

■さて、以上長々と書いてきたことは前置きである。今年、アートプロデューサー養成講座を受講したことは前号に書いたが、９月初めの講座の際、**美山**先生の発案で鳴門市の**ドイツ館**を見学する機会があった。はずかしながら、**ドイツ館**を訪れたのは初めてだった。館の展示物の中に、ドイツ人捕虜の人たちが収容所内で作った各種印刷物が大量にあり、私は非常な衝撃を受けた。謄写版と石版（リトグラフ）が中心なのだが、並大抵の技術ではないのである。第９交響曲の演奏会のパンフレットにしても色刷りで、すばらしいセンスなのだ。材料も道具も極めて制約の多い捕虜収容所の中で、78年も昔、現在のワープロやコンピュータによる物よりもはるかに深みと味わいがある印刷物が発行されていたのである。おまけにその発行点数が膨大なのだ。私はそれらのことに衝撃を受けた。後で調べてみると、捕虜の人たちの中には、印刷職人や製本職人、新聞記者などもいたのである。日本近代の印刷史の中で、ここで印刷された新聞やパンフレットなどは、どのような位置づけがなされるのだろうか。私は胸の高鳴りをおぼえた。

■**ドイツ館**１階にあるミュージアム・ショップで、私は**林啓介**氏の労作『「**第九**」**の里　ドイツ村**』（井上書房/1993）を購入した。同書の中でも特に、印刷物発行にまつわる個所は面白かった。その夜私は、このエピソードを知ったらきっと関心を示すであろう研究者を３人思い浮かべていた。１人は『**日本語大博物館**』の著者・**紀田順一郎**氏、もう１人は**府川充男**氏、そして**朗文堂**代表・**片塩二朗**氏である。この３人が揃ったら日本最強のタッグ・チームができるのではあるまいか。

■数日後、３人に資料を送った。**紀田**さんと**片塩**さんからすぐ返事がきた。おふたりとも関心を示しており、ぜひ機会をみて調べに行きたいという趣旨のことが、それぞれの書簡に書かれていた。

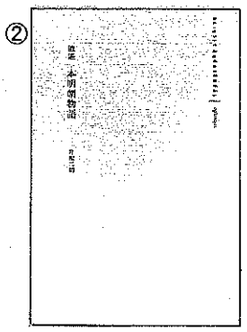
■そして10月21日、**朗文堂・片塩二朗**氏が若手デザイナー２名（**白井敬尚**氏、**木村雅彦**氏）と共に徳島にやってきた。朝、徳島空港に到着し、**板東**氏の運転で淡路、**ドイツ館**、**モラエス**の史跡などをまわったらしい。私は**板東**氏から、夜、**片塩**さんたちと一緒に話をしましょうと誘われていたので、仕事を終えて徳島市内へ出かけた。この日は**創世ホール**で行事があったので、合流したのは午後10時ごろだった。

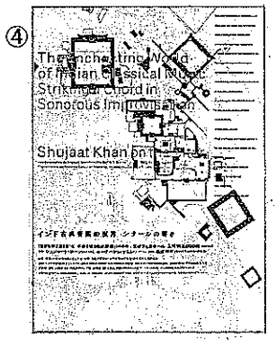
■そのお寿司屋さんには、**板東**氏のお弟子さんと友人の方を含め、６名の人がいた。以下、この夜のこと（話し合ったこと）を少し書きとめておこうと思う。それは文字とデザインに関わる刺激に満ちた内容だった。

■**板東**氏が、デザインした「**インド古典音楽の世界**」のチラシについて**板東**氏自身に解説してもらった。インドの古い建造物の平面図をモチーフに白抜きで生命樹、そして**タゴール**の詩（英文）を組み合わせた構成で非常に凝った物である。解説が終わるとすかさず鋭い質問が次々にとんだ。それに対し**板東**氏はきちんと論理的に返答してゆく。プロの厳しい世界に接して私はびっくりした。私のようなシロウトからすれば、デザインは感覚やセンスが大きい部分を占めるものなのだから、言葉で説明しきれないところもあるように考えてしまうし、それで良いように思うのだが、そうではないらしい。後で聞いたところによると、この日のやりとりなど序の口で、もっと厳しい議論になることもあるということだった。

■それから、段落の最初に１文字分空白を作るインデント（字下げ）の問題。もちろん国語教育で徹底して教えられてきたことであるが、それらを踏まえ十分承知した上で、デザイン的な視点から捉えたときにどうなのか、ということが議論された。これは私も、「**北島タイムス**」編集の経験などからいくつか考えたことがあるので、議論に参加した。記事のリード部分などで、字下げをするとかえって読みづらく、バランスも崩してしまうのだ。例えば**日本広報協会**の添削などでも、リード部分の頭は揃えた方がよいと指導されている。広告の文章や、年表などの限られた字数の文章などでも、頭を揃えた方が読みやすい。そして**杉浦康平**氏が造本設計に関わった、**国書刊行会**の**世界幻想文学大系**シリーズなどは、字下げを一切無視し、すべての本文の頭がそろっていたのである。議論の中で、改行して１文字下げるルールは、明治時代の**二葉亭四迷**以降唱えられたことであり、日本の文字の歴史からすると、それは近代100年の傾向であるということも指摘された。要するに改行１文字下げるか下げないか、という問題１つとっても、生半可な気分に基づくようなものではないということであり、考察と研さんを重ねた上でのことなのである。（95・11・5小西）

後記●10号をお届けします。文字とデザインをめぐる考察については、前からやりたいと考えていました。今回、ちょうどよい機会が得られたので、取り上げた次第です。次号に続きますので、よろしく。（小西昌幸）






図版
①『季刊 印刷史研究』印刷史研究会
②片塩二朗『遊遥 本明朝物語』朗文堂
③林 啓介『「第九」の里ドイツ村』井上書房
④「インド古典音楽の世界」デザイン板東孝明